

茶髪一転、出家、お勤め

いま No.647
子どもたちは
お坊さん高校生①

平安時代初め、弘法大師空海が開いた真言宗の総本山高野山(和歌山県高野町)、標高900mの山上は1200年の歴史を持つ。女人禁制こそ明治初めに解かれたが、今も1-17の寺院が立ち並び、人口35000人の町に僧侶は約6000人いる。町の中心部にある私立高野山高校。昨年11月23日、約140人の全校生徒が講堂に集まり、「追悼法会」が開かれた。同校のすべてに関係者を供養するため、真言宗で最も格が高い法会

の形をとる。主役を務めるのが、宗教科3年生の男女生徒7人だ。本物の聖徳太子を包み、シンバルのような専用の楽器を鳴らし、約1時間半にわたって、様々なお経を唱える。堂々と執り行う姿は、とても高校生に見えない。宗教科では、男女生徒とも入学と同時に出家。戒名を授けられて、真言宗の僧侶(見習い)として、高校生活を送る。男子は全員坊主頭。宗教学者が経営する高校は各教あるが宗教学を目指すコースがあるのは珍しい。同校は「宗教科」という学科があるのは「ないない」らしい。

同校は真言宗の僧侶養成校として明治に開学。当時は男子生徒のみで、全国から集まった弟子たちが親戚で勉強や修行に励んだという。戦後に男女共学になり、僧侶希望者以外の入学も増加。一方で、寺院の後継者たちは地元の一般校に進むケースが増えた。現在、同校は特別進学コースやスポーツコースなどからなる普通科と宗教科の二本立て。宗教科では、1年生の終わりに、卒業する(ころには、法会のほか、布教の実技もある。

追悼法会では、緊張した面持ちでお経を唱える平幡航正君(18)の姿もあった。法会の大役は度目。前回はいま一つだった。追悼法会は、緊張した面持ちでお経を唱える平幡航正君(18)の姿もあった。法会の大役は度目。前回はいま一つだった。

たので気合が入った。「高校3年間で一番いい経験だった」。平幡君は今春、隣接する1年制の専門学校、高野山専修学院に進学することが決まっている。この学校では一切の肉食を禁じられ、友人知人も連絡を絶ち、修行漬けの日々を送る。1年後に卒業すれば、正式に僧侶となる。

平幡君は千葉県銚子市生まれ。2600軒もの檀家を抱える大寺院が実家だ。「早くちゃんとしたお坊さんになって家業を手伝いたい」。そう決心するまでの道のりは長かった。「尾崎豊路線だったんです。ここに来る前は」

尾崎豊は「卒業」などで青春の鬱屈を歌った歌手だ。「小学5年生のとき、通り返りの近所の人に『くそじい』と悪言を吐いて、学校に苦情が来たときから、両親の『すみません人生が始まりました』です」。中3の終わりに髪を染め、髪は脱色して茶色だった。毎日のように友達の家で夜更かしし、親からの電話は無視した。自分から親に話しかけることはなく、話しかけられても『おせー』としがわなかった。地元の高校に進んだが、2年になると「いろいろあって転校することになってしまった」。

そうして出てきたのが、7000人離れた高野山高校だ。宿追悼法会でお経をあげ儀式をする宗教科3年の生徒たち。左から3人目が平幡航正君。和歌山県高野町



追悼法会でお経をあげ儀式をする宗教科3年の生徒たち。左から3人目が平幡航正君。和歌山県高野町

坊のある寺に住み込み、修行しながら学校へ通うことになった。転入を控えた夏、髪をそり、住み込み先の寺へ来た。付き添って来た父は平幡君を託す。髪、振り返る(いびきなく、去っていく)。

さっそく翌朝から、仏様の前でお経をあげる「朝のお勤め」が始まった。起床は午前6時前。衣を自分で着なくてはならないが、家で着てきたのに、うまく着られない。なんとか身につけて、初めてお勤めに出た。

親元を離れ、見習い僧として生活する高野山高校宗教科3年生。男女7人の生徒が自らと向き合った日々を送ります。